

障害者就労 コンサとタッグ

5試合で清掃体験「共生目指す」

障害者が働く場の拡大を目指す「北海道ビープルデザインワーク札幌2030実行委」は、北海道コンサドーレ札幌と連携し、札幌市内の事業所に通う障害者の就労支援に取り組んでいる。第1弾として、4月中旬にコンサドーレのホーム戦が行われた札幌ドームで、障害者のごみの分別など清掃業務を体験した。今季は11月までの計5試合で予定しており、実行委の平間栄一事務局長(36)は「スポーツをきっかけに、社会が障害者を受け入れる幅を広げていきたい」と意気込む。(池田大地)

札幌の支援組織



コンサ戦でごみの分別などの就労体験をする障害者ら＝16日

障害者にさまざまな人たちと接する機会を提供し、障害者の採用をためらう受け入れ側に理解を深めてもらおうと企画。コンサは昨年クラブ創設25周年を迎え、持続可能な開発目標(SDGs)に向けた取り組みに力を入れている。就労体験では、川崎フロンターレで2012年から実績を積んでいる東京都のNPO法人の協力を得た。

16日の札幌ドームには、市内5事業所から各2人の

障害者と支援員1人が1組となつて参加。担当から汚れの少ない紙やプラスチックなど4種類の分別を教わった後、ごみ箱の周りで客への声掛けや分別の手助けを行った。

脳性まひによる身体障害のある西区の志々貝聡さん(42)は「いつもサポーターとして来ているコンサに仕事で関わられてうれしい。声を掛けるタイミングが難しかった」と話し、知的障害のある北広島市の五十嵐彩さん(30)は「視野を広げるために参加した。普段は農作業をしているので、にぎやかな場所で働けてうれしい」と感想を語った。

コンサ企画戦略室社会連携グループの久保田和雅リーダー(38)は「障害のあるなしに関わらず、共生社会の実現に向けて取り組んでいきたい」と話す。実行委の平間事務局長は「市が招致を目指す2030年の冬季オリンピック会場で、障害者が活躍するための一歩としたい」とし、息の長い取り組みを目指す。

来季以降は今季の改善点を踏まえ、回数や参加人数を増やして実施する予定。